



今年も残りわずかなってまいりましたが、どうやらコロナに始まりコロナで終わっていく一年になりそうです。またコロナ対策と経済対策との狭間で大変な苦勞が強いられた一年でもありました。否応なしにライフスタイルが見直されることとなり、日常生活が過ごしやすくなったのかどうかは、受け止め方によってずいぶん差も出てくることでしょう。ただ心配されるのは人と人の関り方が今まで以上に希薄になりはしないかということです。

先日ある方がコロナ禍で職を失い、新たに職を求めるために職安を通して紹介していただいたそうです。職場からの連絡では、オンラインでの面接を行うことになったそうです。しかし、オンラインには不慣れなこともあり、むりやり直接の面接をお願いしたのだそうです。

確かに企業側からすればコロナ対策と、効率化のためなのかもしれませんが、求職者側からすれば、それで私を理解していただくのに充分なのだろうかという不安があったと言います。後日、40分ほどの面接があったようですが、相互に十分納得がいく話ができたと話されました。そして二日後には見事採用の通知を受けられたそうです。

今後の私たちのライフスタイルもコロナ禍によって大きく変わってくるように思われますが、人と人の関り方には大きな課題が残るのではないかと思われるのです。

お花畑に話のたが咲く

取材記事

東結から二ツ木への入り口と言えばよいのでしょうか、お地藏さんがお祀りしてある路の南側に田の一角を埋め立てて造ったと思われるお花畑があります。ここにお花が大好きで毎日通う人がいます。



Y・Kさん(七十七才)。「主人を亡くしてもうずいぶんと経ちますが、今も元気でせつせと畑仕事に精を出していらつやものです。何か用事でKさんを探すのにも、ここに来ればまずはお会いするところができるほどのです。野菜も大根や白菜など何種類かの作付けもしてありますが、Kさんにとっては何と云ってもお花びらに心が傾いている様子なのです。

かつて本堂のお花がなくて困った時などには、通りがかりに車を止め、「無理を言ってお花をいただいたこともありました。今は何種類もの花を育てられています。それぞれに手入れが行き届き、畑に咲く花たちは、秋の空気と太陽を楽しんでいるようです。

またここはKさんにとっては社交場でもあるのです。お花好きの人や近所の方々が作業中のKさんに気軽に声をかけると、立ち話が始まるのです。私が一仕事終えた後に通りかかる時も、まだまだ歓談中といった光景をよくお見かけするのです。いつも笑顔をやさしく気軽に応じていただける明るい性格が多くの人がこの足を止め、話してみたい思いになられるのでしょ。

人生、生きづらいつつも多々ある中で、ふたつこの畑を通り過ぎる時、このお花畑とKさんの笑顔がきつと心の安らぎを与えてくれるはず。お花畑は話に花が咲き、ほつりと心と和むオアシスでもあるのです。



道行く人に
微笑みを。



北島さんの心を癒す花畑。

「おみがき」の体験してみませんか？

今年も残りわずかとなりました。光受寺では毎年、報恩講に合わせて、仏具の「おみがき」を行います。「おみがき」は報恩感謝の思いを込めて、お内陣の荘厳をするためです。多くの方の「参加をお願いいたします」。

期日 十一月七日(月) 九時半～十一時半まで。 さそやかですが、お昼の用意もしております。

報恩講についての連絡

来たる十一月十二日(日)には報恩講をお勤めさせていただきました。予定を致しておりますが、「コロナの関係で午前のお勤めとさせていただきます。詳細は来月早々には「報恩講のご案内」でお知らせいたしますが、お齋はお持ち帰り用として準備させていただきます。尚、**門徒総会**は**地区役員**(各**地区代表**、おつり持ち)の方と、**光受寺役員**(当口、法話終了後)行いたいと思っておりますのでよろしく「理解いただきますようお願いいたします。 **予定** お勤め…九時二十分より 法話…s.k 師 総会 十一時半頃より

今月の掲示板

むげ 「いついひかり」
無碍の光明は
むみょう やみ
無明の闇を
は 破る
破する慧日なり
『教行信証』 総序

「何物にも妨げられることのない阿弥陀仏のひかりは 眞実の智慧がない人間の闇を破る太陽である」

私たち人間の「ちえ」による物事の見方は多くの問題をもつていて、不十分なのです。

それに比して阿弥陀仏の智慧は人間存在の深い闇を破るはたらきをもったものであり、どのような存在も分け隔てなく慈しみ、平等に尊重するものです。

価値観も生活経験も全く違う者同士が、違つうままで共に生きて行く世界が開かれてくるのです。

新コーナー

十二回連載

樹林

自然は無言で、ありのままの姿を見せてくれています。が、その姿を通して気づかされてくることも多いのではないかと思います。

6回目

稲の一生

十月十日を過ぎると、申し合わせたようにあちこちで「コンバイン」が動き出しました。稲作は田植えから収穫まですべて機械化されており、昔のように泥沼を這い回るような重労働はなくなりました。

九月下旬に水田の用水が止められ、秋の日差しとともに稲穂が色づき始め、口ごこに成熟がすすんで、十月初めには黄金色になります。こうして刈り取られ、イネの一生を終えるのです。

弥生時代以来、水田を作り、用水を引いて、稲作栽培が延々と行われて、日本の農村の原風景となりました。水田や水路の造成には大がかりな土木工事を行うものですが、長い時間をかけ、精力的な協働によつて生み出されたものです。水田に立つときには先人の苦労がしのべれます。

稲の花

分けつ

苗



お知らせ

十一月の学習会、金曜茶話会は開きます。